青い春の残りカス

ほし。

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が向いたらたまに書く

前後のつながりはない、かも

目　次

『H？：私たちは結ばれない』――早瀬ユウカ――1
幾層――早瀬ユウカ――17
トリミング――伊草ハルカ――26

『H？：私たちは結ばれない』――　早瀬ユウカ

01

初恋の人と結ばれる確率は、たったの1％程度らしい。

過去の遠くの物好きがそう結論づけたようだ。非常に大規模な統計的試みが行われ、初恋の行く末として結婚に辿りつく確率を大真面目に求めたとか。

当番を任されたシャーレに向かう道中、同門の生徒らしき2人組が、簡単な娯楽を取り扱う気楽さでそう話していた。

話題はすぐに、それを下地にした恋愛話や、やがてまったくべつの脈絡ない方向へ変わったが、私は数回交わされただけのその「初恋の話」にすっかり思考を覆われてしまった。

標本数は？　その取り方は？　適切なデータ処理だったか？　ミレニアム自治区とは離れた場所で確認された結論らしいが、この地域では通用しない局地的な結論ではないか？

――考えるだけ無駄な勘繰りを、その生徒たちが見えなくなってからも続けた。

顔も名前も知らない2人が話題にするところの又聞きでしかないため、信憑性でいえば皆無だ。眉唾の話でしかない。

本来であれば、ただの噂話やいっときの娯楽としてありのままを疑わず受け入れて、飽きて忘れかけた頃には一笑に付す程度の価値でしかないのだろう。だれも本気にしない類の話だ。

しかし、なかなか忘がたく得がたい知識として、私の頭は受け入れてしまったようだった。

「――それで、今日はなにをすれば？」

領収書の整理を手伝ってほしいと情けなく頼んでくる大人に、仕方なさを装ったため息をお見舞いする。

シャーレオフィスの執務室に入った瞬間から、泣きつくような目を向けてきていた。ほんとうに事務作業が嫌いなんだな、と再確認する。

領収書の整理となれば私の得意分野なので、私に任せるのは妥当な判断……それはそれとして、その数が多すぎる。どうも面倒な仕事だからと後回しにしてきたらしい。そのツケを自分で処理しきれなくなって、当番の私に命運を任せた、というところか。

言われるがまま席に着く傍ら、ちら、と目線を向けてみると、彼は作業に取り掛かった私を拝むようにしていた。

はあ。

こうしただらしない大人には、しっかり面倒を見てやれる生徒がつくべきだ。

べつにそれが、私である必要はないけれど、でも、まあ……。

……。

手を動かす。

特別頭を使うような仕事内容でもないので、そのうち色々な思索に頭を回すようになった。

領収書の内容にいくつか疑問点があったから、この後どう問い詰めるべきかとか、もっとお金の使い方に気を遣ってほしいとか、でも小言を言いすぎてもまた彼も離れていくだけかな、とか。

――あとは、「初恋の話」とか。

あの与太話を信じているわけではないが、どうもあの結果を聞いただけだと、むなしく思ってしまう。　なにしろ1%だ。

成功しない恋など、結局は踏み台や前座みたいなもの。それなら最初からあきらめるのが吉。そう簡単に諦められないにしても、一縷の望みさえ叶わないだろうと悟った時点で、すぐにでも切り捨てるのが賢い判断。

なんともむごい話のように思える。きっと、ほとんどの人にとって、そうなるくらいなら、初恋の人とは、初恋を消化しきるまで出会いたくないだろう。でも、それだと初恋の人は初恋の人でなくなるわけで……。

しばらくぐるぐるした。

初恋、初恋。

任された仕事は早々に終えて、指摘しようと思っていた不満や小言もそこそこにとどめておき、彼の書類仕事を手伝えるだけ手伝うと、もうすっかり窓の外は日が暮れていた。

今日の夜は思いがけず冷え込んで、シャーレの玄関を出たときには少々肌寒く感じた。

もう秋らしい。すこし体を縮こめてしまった私に気づいたようで、彼はわざわざ居住区まで上がっていって、買ったきり使えていないらしいストールを持ってきてくれた。ためらいなく巻きにかかってくるので、制止する暇もなかった。次来るときにでも返してくれればいいと、有無を言わせない語気だった。

その後心配だから見送るといってくる先生をなんとか説き伏せて、ひとり帰路に着いた。一応、徒歩で行き来できる近さとはいえ、ミレニアム区域までどれだけ時間がかかると思っているのか。わざわざ見送りなんてさせられない。

私の方が遥かに身体的に強いのに、どうしてああも必要ない心配ばかりしてくるのだろう。偏に彼が優しいだけだとは知っているが、にしたって生徒にかける温情に限りがなさすぎる。

ああして細かな気遣いをかけられるのは、嬉しいことは嬉しい。思わず頼ってしまいたくなるときもある。私だけじゃなく、キヴォトス中のどの生徒をとっても同じことを思うだろう。

それくらい普段は頼りになるくせに、事務作業となるとみっともなくなるのも、彼にも不完全なところがあるのだと感じられて、嫌いではなかった。変なところで子供っぽいのも、いつも完璧を演じている大人の抜けた側面を見ているようで、なんとも言えない感情になる。べつに、だからどうということでもないけれど……。

首元のストールのぬくもりを頼りに歩きつつ、そうした思案の数々に耽る。

――ふと、何気なく思いついて、すぐに頭を振った疑問があった。

初恋が成就する確率、これは分かった。

なら、大人と子供、「先生」と生徒が結ばれる確率は――これは考えないでおこう。

02

そのはしがきを見つけたのは、無意識なりに必然的だったと思う。

セミナーの会計としての仕事を終え、手が空いたタイミングで、溜まっていた不必要な書類を処分することにした。その作業中、思いがけず手が止まることがあった。シュレッダーにかける予定の、その中のひとつに、ふと目に留まるものがあったのだ。

「H?…これは初恋である」。

ちょっとした計算の書き散らしに使用したルーズリーフの端っこに、小さく書かれていた。

いつ書いたものか、おそらく最近、前回シャーレに行ったときあたり、暇を持て余したタイミングで、ごく小さな思考の遊戯を書いたもので、そう大事に取り扱っていたわけではない。

私はそれを何の気なしに取り分けて、処分予定の紙の束から逃した。

――帰無仮説、というもの。

ある仮説1を証明したいとき、その逆を意味する仮説2をたてて、それを否定・棄却することで、もとの仮説1のただしさを主張する手法がある。ようは背理法。その「棄却する側」の仮説が、帰無仮説。帰無仮説とは対となる、採択したい仮説をたてて、対立仮説。

それぞれ「H?」「H?」で表して、「H?…これは初恋である」というのが、このはしがきで見つけたところの帰無仮説だ。

こうした仮説検定は統計的推定のための道具であって、間違ってもこのはしがきのような確率で表せない命題の真偽を問うためのものではない。

それなのにどうしてこんなはしがきが生まれたのかというと……まあ、そういうことなのだろう。

どうも、これを書いたときの私は、ここで決めた「H?」を間違っていると示したかったらしい。そのために適さない手法とわかったうえで、一種の思考の遊戯として。

――――。

シュレッダーのもとに向かおうとしていた頭を切り替えて、次の当番がいつだったか、スケジュール帳を確認する。

来週。すぐだ。

あれからシャーレへの訪問はなかったから、彼と顔を合わせるのは久しぶりになる。きっとまた溜め込んだ雑務を任されるのだろう。領収書関連はしばらくないかな。彼とは対面のデスクで、泣きつくような表情をされるものだから断れなくて、ちょっと小言で突いてみると誤魔化すような顔をして目を逸らされる。眠そうに紙やディスプレイとにらめっこしている。任された仕事が早く終わったからコーヒーでも淹れてみると、顔を明るくしてやわらかな笑みでこたえてくれる。私はそれを……って。

ああ、もう。

このごろの自分がおかしいことは自覚していた。

頼りになるくせしてだらしないあの大人のことを、暇があればずっと考えてしまっている。

溜め込んだ書類に手をつけるときの、隠そうともしない嫌々ながらな表情。雑務仕事となると面倒くさがるひどく緩慢で大人的な疲弊の目つき。そのくせ生徒のことになると親身に寄り添う真面目な顔つき。

……私に詰められているときの、あの情けない顔。

暇さえあれば、そうした印象的な表情ばかり頭で追ってしまう。

最近の私にとって彼は、存在感の比重が重い。

だから、これが初恋であってほしくないと願う自分がいるのだ。

これは初恋でない、ただの親愛や尊敬の延長で、ほんとうの初恋は誰か別の人に回すのだ。それで、どうせ叶わないその初恋は早々に切り捨てる。

そしたらもう、この確率のしがらみからは抜け出せてしまえる。

……。

先ほどの帰無仮説を手帳に書き写しておく。ルーズリーフは他のものと一緒に処分しておこう。

もうこれは、統計も棄却もあったもんじゃない。これは確率の話でもなければ、数学ですらない。ただの言葉遊び。

けれど、疑似的にそう扱うのが、私にとってはやりやすい。どうせ自分では真偽を明確にできない命題を、はっきりさせるのに都合がいい。

「H？…これは初恋である」。

これを棄却すれば、私にとってのこれは、初恋ではなくなる。

次の当番のときにでも、ゆっくり検討しよう。

０３

次の当番のときにでも――と、思っていたけれど。

当番が回ってくるのを待つまでもなく、先生と会う機会を得てしまった。

（はやく来すぎた……）

待ち合わせはミレニアム自治区内の大型ショッピングモール。

休日なこともあって人の密度が高い。

どうもわけもなく緊張しているらしい私は、待ち合わせ時刻の１時間も早くここに着いてしまった。

人の往来から離れた陰に移動して、誰かにごまかすようにスマホを取り出して、目的もなくモモトークを開く。最近の履歴……先生とのトークを開いた。

二日前、珍しく先生の方から連絡があった。

曰く、ネクタイ選びに付き合ってほしい、と。

ゲヘナでの用事で外回りに出かけた際、不良生徒の抗争に巻き込まれて靴下を残してすべて燃やし尽くされたらしいのだ。靴下を残して。

どういう理屈で服を燃やされるに至ったのかは理解できないけれど、早々に対処しにきた風紀委員長の鎮圧で、幸いにも怪我はなかったらしい。

とはいえ、服の方は壊滅的。支給品のスーツや革靴、気に入ってい

たネクタイも塵芥と化したようで。靴下だけは無傷。生命線らしかった。
そういうわけで、私に声をかけたらしいけれど――
「……あれ、ユウカ？」
声に顔を上げる。先生の声。
すこし肩を跳ね上げてしまいつつ振り向くと、そのとおりの人がいる。
物陰にひっそりとしていた私をたまたま見つけたようで、ちょっと驚いたような顔をしている。
まずい。前髪――は、本人の前で整えられない。
油断しすぎた。
「せ、先生？　なんでもう……？」
「待ち合わせまでカフェでも入ってゆっくりしておこうかなって。ユウカこそ、なんで？」
「私は、えっと、その……似たような感じで……」
ごまかしにかかる。
自分でもよくわからないとか、ちょっと緊張してて時間を間違えたとか、とても言えたものじゃない。
今ほんとうのことを話してしまうのは、先生に対して築き上げてきた私の大事なイメージが崩れてしまうようで少し憚られる。
「お、遅れたらだめだと思ったから早く来ただけで、その、べつに、他意は……！」
結果、なにに対して誤魔化しているのか、むしろ変に思われるかもしれない言葉が飛び出た。
先生の方は気にしないで、笑顔で「そっか」とだけ言って切り上げてしまう。
ありがたいのだけれど、なんだかその笑みに焦りを見透かされているような心地になる。ほんとうに他意はなくて、と否定したい気持ちが言葉ならずに胸にたまる。
言い出せずに消化不良のままその会話は閉じた。
とにかく、私もカフェで寛ぐために早く来たのだと、そう解釈して

くれたのは間違いなかった。
その流れで、せっかくなら一緒に店に入ろうと提案してくれたので、それに与って喫茶店に入店することになった。
私はなんでもよかったので普通のドリップコーヒーを、先生も特にこだわりなく同じように頼んでいた。
彼がいつもと違う素振りをしていたのに気づいたのは、2本目からだった。
「あれっ、先生。今日はお砂糖ですか？」
「うん」
2本目のスティックシュガーをどばっと入れはじめた彼に、どんなきまぐれだろうと少し興味が湧く。
「珍しいですね。てっきりブラックがお好きなのかと思ってました」
「よく見てるね」
「はい、まあ。……あ、べ、べつに、変な意味とかじゃなく……」
また誰宛でもないごまかしを口走ってしまう。これがあるから余計に誤った心証を抱かれるというのに、ほんとうに学ばない。
先生の方は、ふふ、と余裕そうに笑ってから、
「まあ、そう。普段は入れないんだけどね」
ガムシロップまで入れ終わったカップにスプーンを入れて、特別な思い入れでもあるかのように、ゆっくり、ゆっくりと回している。ホットコーヒーにガムシロップとは、なかなか組み合わせが独特だ。
やがてカップに口をつけて、すこし傾けたけれど……やはり甘いのは好みじゃないのだろう。
すぐに口を離した彼は、絶妙な表情をして一息ついていた。
上がり切らない口角と、若干引き攣った頬、半分細めた目に、すこし笑ってしまう。
「苦手だな」
「どうして入れちゃったんですか……」
「今度こそはいけるかなと思って」
これまでに何度も試してきたらしい。
飲めそうにないと分かっているなら、無理して克服しようとしなく

ていいのに――と思ったけれど、すぐに、どうもそういう話でもなさそうだと悟った。
スティックシュガーの残骸が2本と、ガムシロップの空箱。
「でも、やっぱり慣れないね」
苦笑しながらもいつものような優しい目を向けるそこに、なんとなく誰かの影があるように思えた。かつて私が見たこともない感情が乗っているようにも思えた。
誰宛の感情か分からない。たぶん、私でない、誰かに。
そういえば、先生はやはり、既に初恋を済ませているのだろうか。
――――。
胸が痛んだ。
砂糖入りのコーヒーを苦労して飲んでいる彼が、すこし楽しそうに見えた。
「ユウカはさ――」

喫茶店を出たらすぐスーツ専門店に向かうのだろうと思っていたら、かなり寄り道に連れ回された。
洋服を見に行ったり、本屋に立ち寄ってみたり、寝心地よさそうな枕を物色したり……果ては映画まで。
大型ショッピングモールの利用法として、これ以上ないほどに満喫してしまった。
「……」
帰りのモノレールに揺られながら、今日一日で観測した先生のはしゃぎようを振り返る。
そういう大人であることは十分に承知していて、そのうえで親愛を寄せているのだから、べつに不満はない。だからというかなんというか、私も救われない。
彼の言うネクタイ選びとはいい口実で、ただ気分転換に遊びたかっただけなのかもしれない。それでもまあ、私は付き合ってもいいかな、という特別感に浸りたい自分が存在することは自覚していた。
べつにそれでいい。それもすべて親愛の結果なのだから。

心の中で誰かに言い訳していて悲しくなる。
先生がイレギュラーな行動ばかりしてくるせいで、本来の目的を終えて帰宅する頃にはもう陽は暮れかけていて、斜陽の傾くのにずっと遠くの方までが赤らんでいた。
彼に見送られた駅前で解散してから１０分もすると、橙色の空の反対には紫雲のような闇が迫っていて、輝きの大きな星が早くも点滅するのが見て取れた。
モノレールの車窓越しに見えるその波のような瞬きに、特に感慨なく視線を向ける。
数秒で飽きた。
手帳を取り出して、つい最近メモしたばかりのページを開いた。
「H?…これは初恋である」。ただの言葉遊びであるとともに、私の感情を親愛であると断言するための、私にとって大切なプロセス。
ぼうっと言葉の羅列を眺めているだけで、星を見るよりもずっと長い思索に入り込める。
ただ、後ろ向きな頭なのが救われない。
――今日は楽しみきれなかった。
せっかく先生と「それっぽいこと」ができたのだ。もっと心から喜んだり、心からそれを表現したりして、もっと距離を詰めてよかった。
帰無仮説、だなんて大層な言葉で遊ぼうとしていたけれど、心の底ではその真偽についてとっくに自覚している。自分のことだから、当たり前のことだ。
そう自覚しているから、今日一日の記憶がたいして良い思い出になりそうになかった。
喫茶店でのやりとりが、どうしても離れないからだ。
たった少しの会話が、ずっとぐるぐるしている。
（初恋、初恋……）
考えないようにと気張っていても、どうしてもそのシーンだけが脳内をリフレインする。
『ユウカはさ、』
砂糖入りのコーヒーを苦労しながら飲んでいた彼が、ふと懐かしむ

ように目を向けてきたのを、私はなにかよくない予感で答えた。
『初恋ってしたことある？』
『えっ』
胸を撃つような苦しみだった。
すぐに顔を下げた。
『……いえ。まだ』
『そっか』
２本のスティックシュガーの残骸と、ガムシロップの空箱をにらんだ。
消えてくれ、と願った。
『私の初恋の人はね、』
楽しげに語る先生を、もう見ていられなかったのだ。

０４

「先生。これ、以前お借りしたストールです」
紙袋を差し出す。
先生は一瞬分からないような顔をして、しばらくして思い当たったように「あぁ、」と声を漏らした。
「そのまま返してくれてよかったのに」
クリーニングのタグが付いたままのストールを取り出して、彼は遠慮するような笑みをしていた。
さすがにそのままというわけにはいかない。目に見えてよごれはしなかったけれど、私のにおいがついてしまったかもしれない。
彼も買ったきり使う機会に恵まれなかったようだから、なおさら綺麗にして返さないと気が済まない。
まあ、もうすこし使用感があったほうが……とかは、ちょっと考えてしまったけれど。
変な意味じゃない。
なんとなく顔を合わせづらい当番も、いざ向かってしまえばなんと

でもなった。
執務室でうんうん唸っている先生に挨拶して、案の定泣きつかれたので持ち込みの仕事が終わり次第手伝うといってなだめて、対面のデスクに座って、早々に作業を始めてしまう。
思ったよりも平常心でいられた。ストールを返すという副次的な目的があったおかげだ。没頭しやすいセミナーの仕事を持ち込んだのも役割として大きいだろう。
すっかり頭の中を作業のほうへ前向きにして、積み上がった仕事を片っ端から処理していく。
久しぶりに、会計としてクリアな頭を保てているかもしれない。
（なんだ、案外簡単だったんだ）
きっと私は寛容な気分になれていた。
過集中じみて周囲の音も遮断するようになって……時間の経過も忘れていた。
「ユウカ」
肩をたたかれて、振り返る。
いつの間にか背後に立っていた先生が、労うように笑いかけてくれた。
給湯室に行っていたらしい。
いつも仕事を手伝ってもらっているお礼、と前置きして、淹れてきたコーヒーを私に差し出した。
いつもとおなじマグを受け取る。
淹れたてでまだまだ熱いそれをひとくち呷る。
いつもどおりの味。
視線を送る。
いつものように苦虫を噛み潰したような顔で、ふたたび作業に取り掛かる彼の様子を、じっと見つめる。
彼の手元のマグには、砂糖もシロップもミルクも入っていない、いつもどおりのブラックが見える。
いつもどおり、コーヒーの匂いがゆるやかに満ちて、キーボードの乾いた音が響く室内で、二人きりでいる。

いつもどおり、私はしばらく彼の顔を見つめる。
これまでと変わらない光景がこうも続くと、なおさら不思議でならない。
あの日、どうして先生があんな話をしたのか真意が掴めないでいる。
いつもと違ってコーヒーに砂糖を入れ始めたのも、いつもと違って遠くを見るような目をしていたのも、いつもと違って私の初恋について訊ねてきたのも、いつもと違って先生が自分から身の上話をしたのも、分からない。
いつもの気まぐれや世間話の延長なのだろうか。
そうでない意図は隠れていないのだろうか。
ずっとなにも理解できないままで、私は――。
「……うん？　な、なにか不備でもあった？」
じっと見つめていると、ふと目がかち合った。
ようやく見つめられていることに気づいたらしい。
いつもどおり、彼はなにか怒られることがあったのだと半ば覚悟しているようで、少しびくびくして不安めいた表情でいる。
いつもどおり、それをいちいち愛おしいとは思うけれど、べつにこれはいつもどおりの敬愛や親愛であって――
「……ユウカ？」
……。
「な、なんでもないです」
見つめ返されただけでいつもと違って動揺して照れてしまうものだから、「いつもどおり」ではもう言い逃れできない。
ぶわっと湧き上がってくるような胸の締め付けに、体温上昇。頭からつま先までが熱くなる感覚。
性懲りもなくどこかに否定できる材料があるのではないかと探ってしまうけれど――面倒だ。もう認めてしまおう。
これは敬愛でも親愛でもなく、情愛。きっと初恋だ。
「こ、コーヒーを淹れてきます」
「え？　まだ残ってるけど――」

「飲み干しましたからッ」
言ってから飲み干す。
まだ熱い液体が喉を焼くように通り抜ける。
先生が困惑した目で見てくるのを感じ取りつつ、振り返らず足早に給湯室に向かう。
……。
つらい。
初恋、の自覚は分かった。
あの日聞いた初恋の人と結ばれる確率の話とかそのあたりも、消化しきれてはいないけれど、もうずっとマシに捉えている。
いや、この際、もはや自分の初恋の話など、どうでもよかった。
「……」
コーヒーを淹れ終えてから、最低な気分でしばらくぼうっとしていた。
不注意でなみなみに注いでしまった黒い液面が、苦しみに近い感情を取れなくしている。
このまま持っていくにはあぶない。
ここですこし容量を減らすべきだ。
少しだけ飲もうとして、思いとどまった。
ミルク・シュガーポットからいくつかを取り出して、その液体に恨みをそそいだ。
「……」
シュガースティック2本とガムシロップの残骸を捨てる。
こぼれないようほどほどにかき混ぜてひとくち飲む。
甘くてやっていられない。
……。
「……苦しい」
急に力が出なくなって、給湯室の床へへたり込むようになってしまった。
気力の問題だと自分でも分かった。しばらく戻れそうにもないと悟った。

「無理」
自覚した感情に歯止めがきかない。
趣味の悪いこの甘ったるさが、助長しているのだと思う。
べつに、あの初恋の噂話がずっと頭を離れないからといって、私たちは結ばれない、と短絡的な結論には至ることはない。
確かに初恋が成就する確率は低い。確率があらわすことのむごさ、これも私は嫌になるほど知っている。
けれど、0でないだけまだ望みはある。
――とは、思うけれど。
「先生……」
頭を抱えた。ほんとうに考えるべきは、そうじゃなかった。
喫茶店で見た、あのときの先生の表情を忘れられない。
残骸に向けていたあの目。
ほんとうに誰かを想っていたのだろうと分かる表情。
どの生徒に向ける慈しみでも親愛でもない、なにか他の感情をもったそれ。
あんなに楽しそうで、懐かしそうで、戻りたそうで、美しい思い出を振り返るような――。
私は、彼に不幸であってほしかった。
彼にとってのこれが、吐き気がするほど惨めで苦しくて胸糞悪くて、二度と思い出したくないものであってほしかった。泥沼でずっともがいていてほしかった。
顔も知らない私以外の誰かとは、きっと不幸であってほしかった。
面倒くさい性格だ。
好きだから彼の不幸を願うなんて、とんでもない性悪だ。自分で考えていて嫌になる。
経験がないから、自分の計算通りに事が進まないと、どうしても我慢できなくなる。
初めてだから、自信がないせいで、幼稚でつたない感情ばかり発露してしまう。
だから初恋なんだろう。

ああもう。もどかしい。
床にマグを置いた。
胸ポケットから取り出した手帳を開く。既に否定しようのない帰無仮説のページを開く。ボールペンで思い切り二重線を引いた。その下に大きく書き直した。
私にとって不都合な結論はこの際仕方がない。それはいい。
どうせ現実はこんなもので揺るがないのだ。きっとあの日聞いた初恋の確率なんかより、もっとむごたらしくて、やるせない壁が立ちはだかるのが現実だ。
だから、そうしよう。
現実を見よう。
どうやっても否定できそうにない、絶望的な帰無仮説でも新しく打ち立ててしまえばいい。
そのうえで、最大限の努力をそそごう。
なみなみと、ここで減らしきれないくらいに。
ペンが紙面をなぞる。
きっと報われない現実を仮想する。
初恋の1％のうえで、考えないようにしていた「大人と子供、先生と生徒が結ばれる確率」をのせて――きっと今まで以上に棄却できそうにない帰無仮説。
「H？…私たちは結ばれない」。

幾層　――　早瀬ユウカ

０１

べつに、大の大人が弱った顔を見せたからといって、それくらいでときめくほど私も甘くない。

ただ、降り積もった雪に先陣切ってダイブした挙句、数秒後には縮こまってくしゃみのひとつでもされると、胸のあたりが締め付けられるだけだ。

「ふふっ。……カイロ、いります？」

はしゃぎすぎたかな、と声と手を細かに震わせながら受け取った大人は、それでも子供のような雪色の笑顔を絶やさないでいた。

０２

今年のこの時期は、大寒波らしかった。２３日から日付をまたいですぐ……イヴの深夜から、大雪になると予報が出ていた。

その日、私が天気予報を見逃したとか、見たけれど忘れていたとか、そういうことは決してなかった。前日の時点で予報は確かに確認していたし、シャーレへの用事でミレニアムを発つ際にも、夕方のこの時間までには帰ってこよう、と計画を立てていた。２４日の０時からの大雪を、間違っても忘れはしなかった。

ただ、所詮天気予報も確率の話。肝心なときに残念なやつだ。

「０％」と示されていた２３日の夕方に、もう窓一面が真っ白に覆いつくされるほどの大雪が降ったとき、既にその日は帰れないであろうことを悟った。案の定雪に強いはずのモノレールの運休通知がすぐ

に来ていたし、遠回りすれば帰れないこともないとはいえ、一体どれほどの寒さに襲われるかを想像して、既にその気も失せていた。
間が悪い。まさにあとひとつだけ仕事を終わらせてから帰ろうと、意気込んだ直後だった。シャーレの執務室で、先生と同時に窓の外の異変に気が付いて、互いに顔を見合わせたとき、きっと私たちは同じことを考えたと思う。
――泊まり？　２人きりで？
経験がないわけではない。
あまりにもセミナーの仕事が多く時間に追われているときや、先生の手伝いが長引いたときは、シャーレの居住区で一晩過ごすことくらいはあった。他の生徒も恐らくあるのだろう。
私の場合だと、幸いミレニアム自治区からは近い方だし、朝方に帰れば余裕をもって次の日を始められる。何度かそうしてきた。
ただ懸念があるとすれば……。
まあ、そのあたりは先生も私も、考えないようにしていたと思う。
タイミングの話というだけではあったし、他に方法もなかったので、とにかくその日は居住区の一角を借りることになった。
ノアにだけは連絡を入れておいて、あとはなんとかしてくれるだろうと楽観的になった。すぐに既読がついた。それから送られてきた揶揄うような返信は、通知から消して見ないようにした。
複数の生徒に彩られたのであろうこの時期なりの飾り付けが、居住区のいたるところに見られた。中には知り合いのものらしき痕跡もあった。インベーダーゲームの敵が赤と緑の配色でツリーを模して並んでいる壁紙や、天辺の星の代わりに機関銃の銃口が見えている歩くツリー型のそりっぽい椅子……？　など。
浮かれた空気感と幸福のにおいがそこらに満ちていた。硝煙のにおいはたぶん気のせいだ。天井の弾痕も知らない。
すこしだけ、私もなにかひとつ残そうかと思い悩んで、やめた。装飾に相応しいものを持っていなかったし、内心でははしゃいでいるのだと思われるのも嫌った。
後ろ向きな気持ちで、おおきなツリーに背を向けた。

それからは……特に何があるわけでもない。
普段はあまり自炊しない先生と一緒になって頭を悩ませながら料理をしたり、苦労のすえ出来上がったものを2人で喜びあったりしていると、すぐにその夜は更けていった。時間をかけすぎた夕飯は、けっしていい出来ではなかったけれど、味は重要でなかった。
何も特別な夜ではない。ただ、すこしだけ、浮足立った居住区の装飾に感化されたらしい。寝る寸前まで特に理由のない緊張が離れなかった。
心を落ち着けようとのぞいた窓の外は、やっぱり大げさなくらい雪が降りしきっていた。

翌朝の4時ごろに目を覚ますと、雪はまばらにやんでいて、まだ暗い窓外には真っ白な景色が広がっていた。予報通り積もっている。電灯の明かりに照らされて、雪道がてかてか光っていた。
すぐに運行状況を調べた。公式のアナウンスだと、始発から通常どおり運行を再開するらしい。仕事が早い。
すっかり目も覚めたのでオフィスまで降りてみると、すでに先生は執務室に閉じこもってなにやら作業を始めていた。気づかれないよう給湯室に向かった。呆れながらコーヒーを差し出すと、柔和な笑みで受け取ってくれた。
「ちゃんと寝てください――お願いですから」
12月24日。
毎年誰もが惚けたような表情で浮足立つこの日も、生憎今年は平日で、私も彼も自身のコミュニティのなかで求められた役割を演じなければならなかった。世間はほとんど休みだけれど。
私はセミナーの会計としての立場と……それに、年内最後の授業もある。BD学習とはいえ、受講時間に遅れるわけにもいかない。早朝にはシャーレを出て、ミレニアムに戻る必要があった。
彼はそれよりも早くから起きていたらしい。デスクに溜まっている書類の量はいつもと変わらないように感じたのに。ひょっとして時節にかかわらず毎朝こうなのかと思い至って、憤りや罪悪感がない

まぜになって感じられた。
困ったような笑みで誤魔化して、先生は否定した。
どうも、私を送り届けるために早起きしてきたらしい。
あたたかい格好に着替えて外に出てみると、車道には既にいくつもの轍で凍りついた跡があった。
昨日の夕方から今朝まで、あんな大雪の中でも車の通りはあったのだろう。
しかし、歩道のほうは踏まれた形跡がなく、まっさらのままでいた。
外套に自販機のあたたかいほうを忍ばせて、熱を守りながら帰路を辿った。駅までは近い。
ペットボトルの容器越しに手を温めながら、彼が先導するその足跡をなぞるように、おなじ場所を踏みしめ、後ろに続いた。
まだ少し余韻のような雪が降っている。ちらちら視界を通りかかるそれらを跳ね付けて歩いた。
新雪は怖い。
特に降り積もった直後の早朝。
まだ誰も外に出ていないような時間帯では、新雪はどこも踏み固められていないから、濡れた足が重たくなりやすく、靴の中にどんどん水が入ってしまう。まだ暗い早朝ではそれだけでも怖い。
だから、せめて1人だけでも先陣を切って、道を作る人が必要。そのために彼は「送り届ける」と言い出した。
……というのは建前で、雪道の誰も踏んでいないところに足跡をつけるという密かな楽しみを、早朝に、しかもほぼ手の付けられていない状態で享受したかった、と語ったのが本音らしい。
童心を忘れていなくて結構。これを愛おしいと思うのだから、もうどうしようもなかった。
これくらいの可愛い童心なら、もっと普段から出してもらいたいものだ。おもちゃの大人買いとか、そういうのじゃない方面で。もっとこの類の童心を。
童心。
童心……。

……。
いや、さすがに飛び込めとは言っていない。
うずいてたまらなかったらしい。
雪を顔じゅうに纏わりつかせて、若干白っぽくなった顔で「はしゃぎすぎたかな」とか笑っている。
私はしぶしぶを装ってため息を白く吐いた。
こうして情けない大人にペットボトルのカイロを渡すのも、嫌いじゃない。

03

先生の全身の雪を落としていると、とくにわけもなく、今まで辿ってきた足跡が目に付いた。
きれいに1人分の足跡だけが残っている。先生のものだ。私はその上を歩いてきた。ひと回り大きいサイズだったから、合わせて歩くのは簡単だった。
この1人分にしか見えない足跡は、彼のやさしさや子供っぽさの現れみたいで好きだ。
だけどすこしだけ残念な思いがあるのは、それが1人分にしか見えなかったからこそなのだろう。
「ほら、前行ってください。もうすぐですから」
震えが収まった彼の背を押して、先ほどまでと同じように歩かせる。すこし粗暴になってしまった。彼は何も言わず足を動かした。
先生の足跡をたどる。会話はなかった。列になっていると話しにくい。足元に集中しているとなおさらだ。黙り込んだ。
ずっと足元ばかりを注視していると、ふと、先生のつくる足跡の間隔に違和感を覚えた。ようやくそこで、いままで歩幅を小さくとってくれていたことに気がついて、やっぱり黙り込むしかなかった。

駅近くの商店街を通りすがった。
店はほとんどシャッターが下りていて、まだ人の起きてくる気配はない。
しかしまあ、飾り付けが多い。ほんものの雪を被ったツリーやリース。光っていない電飾。店前の風船、くつした、雪だるまの人形……。
今夜に備えてのそれらに、やっぱり浮足立った雰囲気を覚える。気が早く、そわそわしている。大事な人と過ごすそのときを、町全体がずっと待ち遠しく思っているような、幸福に満ちたそれら。
この空気感は好きだ。感化されて嬉しい気分になれる。
まあ、私はこれといった用事はないけれど。
「……」
――先生は誰かと過ごすのかと、昨日のうちも、今も、尋ねることはできなかった。
いや、聞くまでもなく答えは知っていたから、尋ねる必要もなかった。
どうせ仕事が恋人だとか冗談めかして笑って、実際誰と過ごすわけでもなかったろうから。
ただ、
（みんな気にしてる）
先生の扱いについて、おそらくキヴォトス中に共通認識があるように思う。
誰もが同じ結論に至っているかは分からない。けれど、みんな言葉にしないだけで、きっと心の奥底で気づいているはずだった。
自分では――「生徒」では、彼の隣に特別な居場所を求めることはできない。
卒業後とか、私が大人として振る舞えるようになれば、もしかしたら可能性に恵まれるかもしれないけれど……それでも、細い道だろう。
私たちを見守る役割を終えたなら、先生はまた新しい「生徒」に目を向けるだけだから。
「……」

先生の過去についてでさえ、私たちは何も知らない。その質問をしなかった。
どこで生まれたのか、いつ自我が芽生えたか、どんな環境で育ってきたのか、なにを一番大事にしていたか、どうやって生きてきたのか、なぜここに来たのか、誰を一番――今までクリスマスを誰と過ごしてきたか、誰が初恋の相手だったか。
「……」
今も、聞いてしまいそうになる衝動を必死で噛み殺している。みんなそうなんだと思う。
誰に強制されているとか、彼について知ることが許されていないとか、そういったことはない。
ただ、雪を融かす光は、誰も掴めない。それだけ。だから眩しいんだろう。
「先生」
私たちは光を受けて融かされていく存在でしかない。
振り返らず返事を寄越した彼に、続ける言葉は持っていなかった。ほんとうはあったけれど、何も言うべきじゃなかった。
私はなおも黙りこくったのだ。自分から呼びかけておいて身勝手なものだった。私は彼の背中を見ていた。歩を進めるにつれて、変わらず一定の間隔で肩を上下させていた。先生はそれ以上聞き返したり、振り返ったりしなかった。
「……」
俯いた。
足元だけを見た。
足跡が私の前につくられている。
私を先導するために、通るべき道を指すようにつくられている。
彼は「前」にいる。
「……」
彼の踏んだ足の形から、一歩分……いや、半歩分だけ。横にずれて、足跡に並ぶように歩きはじめた。
雪の冷たいギシギシとした感触が、靴の底から伝わってくる。新雪

にはじめて足を踏み入れる感覚。鳴き雪の低い踏み音がひとつ余分に増える。
先生には気取られないよう注意していると、しだいに靴の中がぬれだした。
相変わらず会話はなかった。私たちは足元にばかり集中していた。

04

駅が突き当りに見えてきたところで、振り返った。
私たちの足跡は、まだ暗い早朝の雪道に、もうずっと向こうの方までただふたりぶんだけあって、こうしてみればあたかも寄り添って歩いてきたようだった。
私はそれを何度も目に焼き付けるように、寒気に凍みて瞬きした。
――――。
ふたたび前を向いた。
彼は立ち止まった私に気づかなかったようで、すこし離れていた。小走りで追いつくと、何もなかったかのようにおなじことを続けた。
彼の後ろで、まるでずっと隣を歩いてきたふうに振る舞って、満足した。
「……先生」
もう一度呼びかけた。黙りこくったおかげで声が出にくかった。
聞こえなかったらしい。今度は返事もなかった。喉が渇いていた。
暖に買ったペットボトル飲料の存在を思いだしたので、口をつけた。外套の中ですっかり熱を失ってしまっていた。
キャップを閉めると、空気を吸った。
潤った喉が、吸入した外気にふれて冷たく感じた。
吐き出すときはいくらか温かく感じた。
伝えたいことがあった。
聞くことはもうしない。これはなにかを尋ねるための呼びかけじゃない。もう言葉に迷うことはない。
「先生」

彼が振り向かずに注意を向けるのに気がついた。
そのまま続けた。
「先生。これはべつに、ただの余計なお世話なんですけど」
私を駅まで送り届けたあとは、きっと彼は同じ道のりを帰っていくのだろう。
そのときにはもう、街も起きてくる頃合いだろう。私たちの足跡は他の誰かのものと混ざって、見分けがつかなくなっているかもしれない。
――そうでなくても、私たちの痕跡はいつか消える。
今は降っていないけれど、いつかまた大雪が降る。いつの間にかそれが幾層にも重なって、けれどそのうち陽の光で溶けだして、あとかたもなくなる。
でも、もし、叶うなら。
「帰り。足元、気を付けてくださいね」
――心配ありがとう。
私はなにも答えなかった。

トリミング　――　伊草ハルカ

01

そろそろ髪を切らなければと焦りだすのは、前髪が目にかかってきて鬱陶しいと感じたときでも、洗髪のときになんだか手間が増えてきたのを自覚したときでもない。

見かねた先生や事務所のみんながそろそろ切るようにと指摘してくださったときだ。

「髪伸びたね」

「え？　か、髪ですか……？」

先生からの指摘はいつも、シャーレの仕事の手伝いをしているときか、「いつもの場所」で一緒に雑草の様子を見ているときに入る。

指摘されたとたん、私の頭の中はもういっぱいになってしまって、思考が悪い方向を向いて固まってしまう。きっといつものように先生に迷惑をかけてしまったのだ、そうに違いない、そうであってほしい、そうでないなら私なんかの髪のことに言及するはずがない、どう詫びよう、死んでしまいたい、ｅｔｃ．

前髪に遮られた視界の中で、先生がやわらかに笑顔を向けてくれているのを理解しつつも、私の頭の中はもう、勘繰りや後ろ向きな考えでいっぱいになるのだ。

「す、すみません。見苦しかったですよね……」

「え？　いや」

「い、今すぐ散髪に行ってきますので……あ、ああでも先生と一緒にいるのが嫌で抜け出したいというわけじゃなく……」

「ハルカ」

「いえ、先生が貴重なお時間を割いて私に構ってくださっているので、やはり今から行くのはやめに……で、でもそれだと見苦しい頭をお見せし続けることに……あ、あの、えっと……」

「話をね」
手近に置いていたショットガンを抱える。
「し、死んでお詫びします！」

０２
目にかからなくなった前髪のおかげで、洗髪のときの手間が減った。
先生のおかげだと思った。
先生は間違いないなと思った。
先生はやはり素晴らしい方だと思った。
ｅｔｃ．
あれだけ鬱陶しかった前髪は、それまで私を覆っていた不快感や気だるさと一緒に軽くなった。
すっきりした視界が良い。季節を感じるぬくもりやささやかな風などが感じやすくなって、そういえばもう春だったな、と思い出させてくれる。
気分が良いのは、それだけが理由じゃない。
人からの指摘で初めて髪を切ろうと思えるような人間だから、やはり髪型などどうでもよくて、髪を整えてもらう店もどうでもよかった。なんとなく暗めの店に入って、読み通り暗めの人が鋏を扱っていて、不必要な会話が発生せずにスムーズに作業に入ってくれた。
髪型なんて決めていないから、普段通りの髪型をそれとなく伝えた。今のところ、事務所のみんなや先生から不評を買うことのなかった(そもそも評するほどの興味がないだけだろうけど)髪型なので、これにさえしておけば、彼らを失望させたり、不快な気分にさせることはなかった。
そうして数か月前と何ら変わらない私の形が出来上がって、面白み

もなくまた同じ繰り返しに身を投じるのだった。
私にはそれがちょうどよかった。
変化を誰にも気取られないくらい地味で、そもそも変化なんてほとんどなくて、凡庸で、むしろ邪魔ばかりしていて、どうでもいい存在であり続けることが、私に安らぎをくれる要素でもあったのだ。
ちょうど、雑草みたいに。
――すん、すん。
誰かのすすり泣く声が聞こえた。
すっきりした視界を気に入りながら、いつもの場所で雑草たちの様子を見ていたところだった。
この建物はゲヘナ郊外のはずれのとても辺鄙なところにあって、誰かが訪れるような場所ではない。
幻聴や聞き間違いを疑った。しかし私は精神的に参っているわけでもなかったし、なにか環境音を泣き声に勘違いしたわけでもなさそうだった。幻聴・幻覚作用のあるものを体内に取り込んだ覚えもない。そうしたガスが発生するような地域でもないし、育てている雑草の中にそのような効能がある植物もない。４２０は雑草ではない。
幻聴や聞き違いでないとするなら、そこで本当に誰かが泣いているのだった。
「害虫」かもしれなかった。
――すん、すん。
入り口の方だった。
建物を外に出てすぐのところだと分かった。
普段誰も訪れない場所だったので、ひどく警戒した。
この趣味は、誰にも見られたくなかった。笑われたくなかった。踏み荒らされたくなかった。
「誰ですか……？」
ブローアウェイを構えながら入り口の方へ向かう。
すんすんと、まだすすり泣く声が聞こえている。
か細く幼い印象で、うずくまって静かに泣いている少女が想起された。

少ない知り合いの特徴には一致しなかった。
事務所のみんなでも、先生でもない。
そもそもこの場所を知っているのは先生だけで、知り合いであるはずもなかった。
駆除しなければ、と思った。
「こ、ここから立ち去ってください、う、撃ちます、撃ちます、消します、ここから立ち去ってください」
声が聞こえるすぐそこのところで立ち止まって、警告を投げかける。
あと一歩踏み出せば会敵できる。入り口から飛び出して、その姿を確認できる。撃ってしまえる。
声は止む気配がなかった。私の警告を無視して、ずっと弱々しい声を上げ続けている。泣いている。
――すん、すん。すんすん。
「う、うわあああ!!!!」
私はできるだけ声を荒げて、体を奮い立たせた。
飛び出す。
声へ銃口を向けた。
「う、わあ、あ……？」
誰もいない。
私の想像していた、うずくまって泣いている小さな少女の姿はどこにも確認できなかった。
しばらく呆然としていると、いつの間にかすすり泣く声は聞こえなくなっていた。
確かに聞こえていたはずだ、と何度も自分の記憶を責め立てた。
ひどい眩暈がした。気が狂ったのかと自分を疑った。
こんな自分では駄目だと思った。
「……あれ」
その場にいるはずのない物が「いる」ことに気が付いたのは、自死が脳裏を掠め始めた頃だった。
朽ち果てた市松人形だった。少女を模ったものだ。ひどい有様

だった。
服はボロボロで、髪もぼさぼさ。前髪などひどいもので、短く乱雑に切られていて、とても不格好でいる。燃えてちりちりになったような跡さえ見受けられた。肌には焦げた跡もあった。誰か悪趣味な人間にそうされたのだと分かった。
けれど、元々はとてもきれいな形をしていたに違いなかった。
「……」
周囲を見渡した。
この市松人形を捨てにきた人間がいるはずだった。
今の今まですすり泣く声が聞こえていたのだから、声の主はそう遠くない場所にいるはずだった。隠れていたとしても、その気配にまったく気づけないはずもなかった。
周囲を細かに観察して、誰もいない、と確信を得てしまうまでは早かった。
誰かの侵入した痕跡は見られない。
人間の息づかいが忍んでいる様子も、どこかに視線が及んでいる気配もなかった。
いつもの静けさに満ちていた。
周囲に向けていた注意を、ふたたび人形に戻した。
だとすると、人形が泣いていたとでも言うのだろうか。
気味が悪かった。
「……」
普段なら「駆除」しているはずだった。
私はそれをたいせつに拾い上げていた。
たぶん気の迷いだ。
あまりにもボロボロな有様を、昔の自分に重ねて見てしまったのかもしれない。
だとしても、気の迷いだった。
明日にはきっと気味が悪くなって捨てているだろう。
そう思いながら、私は彼女を雑草の鉢といっしょに並べることにした。

翌日になって、雑草たちの様子を見に戻ってきたところ、人形の髪が伸びていた。
伸びすぎたらしかった。人形が涙目になって、私を縋るように見つめてきていた。
なんだこいつ、と思った。

03

雑草はひっそりと力強く生きていて、偉いなと思う。
どこにでもいるわりにたいして役に立たないし、人に迷惑をかけてばかりで、そのくせ数だけは多い……無価値な存在だけど、それでもその強さは見習いたいところだった。
いつもの場所で、雑草たちに虫がついていないか確認しながら、そう再認識した。
私の手がなくともこの子たちは生きていける。少しの日の光と水さえあれば、どんな窮屈な環境でもしっかりと根差すことができる。
そこに人間の介入は必要ない。本人たちの微かな息づかいが止まらない限り、不変でいる。
誰にも見てもらえず、誰にも褒めてもらえなくても、生きていけるのだ。
けれど、誰かに見てもらえている方が、きっと彼らも誇らしいのは間違いなかった。
だから私はここに通い詰めているのだと思う。彼らに喜んでもらいたくて、ここに足を運んでいるのだ。
誰にも見てもらえなくても生きていける力強い存在を、それでも見守るために。

誰かに見てもらわなければ生きていけない存在が、その隣に増えたけど。
雑草たちの観察もほどほどに、視線を問題児に向ける。
たった1日で髪を伸ばしきった彼女は、昨日どんな髪型をしていたか忘れてしまうくらいもっさりとしていて、面影がなかった。
心無い人間に乱雑に切られて短くなっていたはずの髪が、今は体全体を覆ってしまうくらいに伸びきっている。
人形なのに、髪を伸ばしたのだ。
「……」
これの処分について、考えるのは難しかった。
雑草たちの様子を見ることでまとまった考えを得ようとしたものの、よい結論は結ばれなかった。
まず、この人形が何なのかについてハッキリさせなければならない。
これは心当たりがあった。
どこかで聞いたことがある。強い怨念が宿っているせいで、人間のように髪が伸びていく、髪伸び人形の話。
オカルトや噂話ぐらいなもので、実物があるとは思っていなかった。ただ実際、ここにあるのはそういう類のものだ。
強く怨念のこもった、呪われた人形――これは分かる。
そこで次に考えるとすれば、それが私や雑草、ひいては先生やアル様たちに悪影響を及ぼすかどうか、になるのだが。
なんというか、泣きそうな表情をしているのだ。
こんなやつが人を呪えるはずがないと思ってしまう、惨めな表情。
私はそこに困っていた。
「……あ、あの」
私を縋るように見ている……ように見える人形に、どう言葉をかけるか一瞬悩んだ。
「伸びすぎた、ってことですよね……」
なぜ人形に話しかけているのか、話しかけるとしてなぜ敬語なのか、自分で理由付けできれば苦労しなかった。

親とはぐれて泣いている幼い子供のような雰囲気があったから、放っておけないのかもしれない。
人形からの返答はなかった。喋らないようだ。髪は伸ばすくせに。
「……！」
答えないかわりに、すこし人形の表情がやわらいだように見えた。
もう私の妄想や思い込みにしか思えない微細な変化だった。
正気じゃないと思いつつも、私はそれを肯定と受け取ることにした。
「……」
髪が伸びすぎたというなら、切ればいい。
つい先日私がそうしたように、適当な相手に鋏で切ってもらえば――いやでも、だれに？
私が行った理容室の人？　いや、人形の髪を頼むのは気が引ける。というか、引き受けてもらえない気がする。
先生？　論外。激務に疲れている彼にそんなことはさせられない。頼めば引き受けてしまうのだろうけど、頼みごとをすることさえ、私なんかには烏滸がましい。
アル様？　論外。先生と同様、私の個人的な理由のために彼女の手を煩わせるわけにいかない。事務所の他のメンバーも、私なんかが迷惑をかけていい人たちじゃない。
なら――
「……えっと、私でよければ、切ります」
迷惑をかけてもいいのは害虫、それと私自身だけだ。
人形の表情を確認して、それから剪定鋏を探した。

＊

「えっと……誰かの髪を切るのは初めてだったので……あの……」
死んだ表情から目を背けながら、そう言い訳した。
もはや人形の髪型は名称を持たせることも困難で、とても不格好なものになっていた。不細工に切られた髪に、人形は絶望していた。そ

の表情で私を見ていた。
髪を切るための知識が私に備わっているはずもない。興味すらないのだ。
私のせいだった。
「つ、次はうまくやりますので……」

＊

「あの、ほんとうに申し訳ないと思ってます……」
結論を言うと次の日も失敗したので、人形の目がまた死ぬことになってしまった。
やはり一晩で髪を伸ばした彼女を救うために剪定鋏を握って……
それで、この髪型は……なに？　なんだろう。どんぐり？　とりあえず簡単なおかっぱを目指していたはず。杓子？　落ち武者？
「べ、勉強します……次こそ上手くやります……」
私は将来理容師にはなれないだろうな。
技量がないだけ、とかではなく、決定的に何か欠け落ちている気がする。誰かの髪を扱っていることの大事さとか、心構えとか、プライドとか。
そもそも、剪定鋏を使うことから間違っていたのかもしれない。
これは雑草たちの成長を妨げてしまう枝葉を間引くためのもので、誰かの髪を切るためのものじゃない。
そうだ、これだ。

＊

「……ほ、ほんとに真面目にやってるんです。睨まないでください……」
とりあえずバリカンを使うのはやめよう。
鋏を買おう。
横着しないようにしよう。

中央道が開通している人形の頭から目を背けて、明日こそうまくやろうと決めた。
けっして、明日には再生してるんだからいいや、とか思ってない。
「つ、つぎこそ、ちゃんとやるので――」

０４

「今日もよく伸びてますね……す、すぐ楽にしてあげますから……」
人形の髪を指で梳く。
一晩で伸ばしきった髪は、相変わらず重たくもっさりとしている。
ただ、案外綺麗なものだなと、最近気がついた。
こうして手を通してみると、抵抗なく指の間をするすると流れていって、透明みたい。
光沢をもつ艶があって、瑞々しくて、若くて、作り物のよう、……ではなく作り物。
人形はいつも通り泣き出しそうな表情だった。伸びすぎた髪が嫌らしいのはずっと変わらない。
ただ、私が髪の手触りや色艶を楽しんでいると、すこし嬉しそうな表情になるのが愛おしかった。
「……へ、へへ」
気味の悪い笑みがこぼれる。
前からそうだったけれど、よりいっそう誰にも見られたくない場所になってしまった。
しばらくのあいだ、意思に無遠慮に上がる口角を押さえつけるのに苦戦した。
はやく髪をなんとかするべきだ。

彼女はとにかく毛量が多いから、すきばさみで大幅に間引いてあげるのがよかった。
小さなクリップで髪を４つに区分けして纏めて、普通のはさみで肩あたりの長さに揃えてあげる。
それから、すきばさみを使って膨れ上がった頭を軽くしてあげる。
それで、たぶんいいかんじになっているのだ。
わからない。
相変わらず興味はない。
そうした一連の作業を頭に浮かべて、ただ手を動かす。
未だに慣れない作業に手間取りつつ、考え事をする余裕くらいは持ち合わせていた。
内容としては、もっぱらこの状況に関してだ。
すっかり馴染んでしまった。
雑草の様子をひととおり見終わったあとは、人形の世話をするのがいつもの流れになっていた。
髪のことに加えて、肌の焦げ跡を見えないようにしたり、害虫に纏わりつかれているのを駆除したり。
人形を拾ってからそろそろ1か月になる。慣れが怖かった。
この先もこの人形を世話していくのか、いつかどこかのタイミングで捨ててしまうのか、何も決めずにここまでやってきた私には、慣れが行き過ぎて情が移ってしまうのが怖かった。
今のうちに捨ててしまえばいい。結局はただの人形だから。それに、どうせこの人形もいずれは私に失望するはずだ。だからその前に。
勘繰りが過る。
作業が終わって、人形の短くそろった前髪を見ると、そんな考えも吹き飛ぶのだ。
「できました、どうでしょうか……」
つたない作業が終わったあとは、人形に鏡を向けた。
私には人形を可愛くしてやれる技量もなく、ただのおかっぱ頭になった。

市松人形っぽい風貌と言えばその通りだが、地味で特別な変化のない雑草みたいな髪型だった。
「……！」
彼女は嬉しそうにしていた。私にしか分からない微細さで、頬を上げていた。
その表情の前では、私はどうしても彼女を裏切れる気がしなかった。
ただの人形相手に、おかしい話かもしれない。相手は無機物だし、呪われているし、言葉を発しないし、コミュニケーションは私からの一方向だけ。
それなのに、短く均一にそろえただけの前髪に喜ぶのが――たったすこし表情が変化するのが、私の心のどこかを掴んでしまっていた。
既に情が移ってしまっているのだろう。
私も自ら気付けないうちに、彼女はもう、雑草と同じ扱いを受けていた。
彼らにそうしてあげるように、不要な髪の枝葉を間引いてあげるのはつまり、そういうことだ。

＊

たまに、彼女を見つけたときの外見を思い返す。
前髪は乱暴に切られていた。前の所有者はきっと、勝手に伸びていく髪を気味悪く思ってそうしたのだろう。不揃いな前髪が昔の私みたいで、印象に残っている。
着物は切り裂かれたり焼失したりした部分があった。顔や肌には焦げた跡。どこを見てもボロボロで救いようがなかった。
対して今の彼女は、それなりによくなっているはずだった。
前髪は……とても褒められた出来ではないけれど、少なくとも発見したときよりはマシになっている。
焦げ跡の方も、このために買った肌色のファンデーションでごまかされて、もうあまり目立っていない。

ただ、彼女の着物だけがどうにもならなかったのが、どうしても引っかかる部分だった。
切り裂かれた跡も焼かれた跡も残っているし、焦げ跡を誤魔化すためのファンデーションが一部こすれて汚れてしまっている部分もある。
後者は自分で落とせばいいとして、物理的な破損については私ひとりの作業でどうにかなるレベルではなかった。
「……」
雑草や人形から視線を外した。
「えっと……また明日来ますので……」
もうそろそろ事務所に行くべきだと立ち上がる。
この場所に来るのは、多くは朝早くか暇なとき、そうでなければ任された仕事を終えた後、事務所のみんなと解散した後などだ。
今日は明日の作戦準備を遂行した後に来たのだった。ターゲットを確実に仕留めるために各所に爆弾を――という手法は以前先生に怒られてしまったので、ターゲットの移動先を誘導するための罠をいくつか設置してきた。
その後すこし時間をとって雑草たちの様子を見に来たが、そろそろ事務所へ報告に行くべきだった。
最後に室内の温度や湿度を確認して、建物を後にした。

道中、考えるのは人形のことだった。そろそろあの変化のない髪型もどうにかしないといけないとか、今度勉強してみようかとか。
それから雑草のことを考えた。そろそろ土を持ってきてあげないとな、夏にでもとってこよう。
それからアル様のことを考えて、先生のことを考えて、もう一度人形のことにもどってきた。
彼女の着物について、どのようにすれば正解になるのかを追った。
あのボロボロの服のままでいさせるのは、あまりにもあんまりなので、新しい着物を買ってしまいたい。そうした店があるのも知っている。

ただ、私には物に価値を与えられる目が備わっていないし、だからといって安い物で済ませたり、価値が分からないまま高価なものを買ったりするつもりもなかった。
中途半端にしたくなかったのだと思う。
綺麗に着飾ってあげられるのなら、そうしてあげたかった。
「――あら、おかえり。ハルカ」
事務所に戻ってくると、アル様の落ち着いた優雅な声に出迎えられた。
全員揃っているようだった。カヨコさんやムツキさんも、私に気づいて「おかえり」と声をかけてくださっている。
「た、ただいま戻りました……！」
こういうとき、私はいつも感極まるほど嬉しくなるのだけど、この日はそれほどでもなかった。

報告はスムーズに行われて、明日の依頼内容の浚いや作戦の確認、それぞれの担当とその配備を覚えた。
久しぶりの依頼だったから、なんだかみんな張り切っていたと思う。
「――ハルカ？」
アル様に声をかけられたのは、会議が終わって少し経った後だった。
明日に備えて今日は解散、と号令が出されてなお、そのまま突っ立っていた私を不思議に思ったらしい。
すぐに謝罪を述べようと口を開きかけたときに、ずっと考えていた問いの答えを思いついてしまった。
アル様にたのみごとがあって……と口走ってから、自分のしでかした不敬に気付いた。
「た、たのみごと……!?」
「……や、やっぱり私なんかが烏滸がましいことでしたよね！　忘れてください！」
「あ、いえ、そうじゃなくて……ただ驚いただけで、私は、」

「忘れてください……私の存在ごと忘れていただければ……いえ、その前に私が……」
「ハ、ハルカ？」
「すみませんすみませんすみませんすみません……」
変な思い付きを浮かべた出来の悪い頭を呪った。
アル様が心配そうな目を投げてきている、気がする。
一旦後ろ向きになると人の目を見れないもので、私は目を伏しながら呪詛のように謝罪の言葉を捲し立てていた。
「……社長」
「アルちゃん」
ふたりにも心配をかけてしまったのかもしれない。
事務所を出ようとしていたカヨコさんとムツキさんが戻ってくるのがわかった。
アル様の名前を呼んで、ただしい判断を仰いでいるらしかった。
「……わかってるわ。そうね」
お二人からの言葉の意味を汲み取ったらしい。
「ハルカ」
顔を上げなさい、と言われたのでそうした。
へぁ、とヘトヘトになりながら返答した。
「部下の頼みを聞き入れてあげるのも上司の役割よ。言ってみなさい」
勘繰りに回っている私の頭はなかなか受け入れない。
「だ、大丈夫でしょうか、私みたいな者が……」
「本物のアウトローは誰だって気遣えるものよ」
「そ、そうなんですか……？」
「ええ。先生がそう言ってたもの」
「そうなんですね……！」
すべてに納得した。
「で、では、不躾ながら……」
思いついてしまった「解答」を確かめる。
「あ、あの、正月にレンタルした着物についてなんですが――」

０５

「そろそろここも暑くなってきたね。あの子たちは大丈夫なの？」

「最低限は冷房設備がありますので……そ、それに、環境の変化には強い子たちばかりですから」

「そうだよね、さすがハルカ」

汗を拭いながらいつもの建物に入る。

屋内なのでじわじわと広がる蒸し暑さはマシになってくれたものの、肌に貼りつく空気は変わらず夏のものだ。

雑草を育てている部屋はこれよりも涼しく保っているので、先生に早く涼んでもらえるようにと、その一心でいた。

「ふう……とりあえず仕事は終わり、かな？」

部屋に運んできた袋を床に置いた先生は、深くため息を吐いた。それから、土を詰めた袋に穴が開いていないか確認していた。雑草のために取ってきた土だった。もともとは私が運んでいたところ、偶然出くわした先生が手伝ってくれたのだった。

私は最大限の表現で「手伝わなくていい」と伝えたけれど、結局いつもの流れで押し切られて、先生の底抜けの優しさに甘えるだけでいた。

「私ももっとここに来れたらいいんだけど。手伝えることあるだろうし」

「え、あ……その、お忙しい先生にそんなご迷惑はおかけできませんし、ただでさえこんな薄暗くて湿っぽくてジメジメした陰湿な場所なのに、蒸し暑いこんな時期に先生をお呼びするわけには……あ、いえ、そ、その、決して先生の意思を無視するわけではなくて……」

「うん。ハルカは私を気遣ってくれてるんだよね。ありがとう」
「いえ、私はそんな……あ、でも、はい。どういたしまして……？」
いつも通り先生との会話はたぶん会話になっていなくて、私ひとりで話をややこしくしているだけだった。
焦りや不安でいっぱいになって妙なことを口走る私を、それでも見捨てずに理解しようと努めてくれるのだから、先生はやはり偉大な方だった。
そういう大人だった。

先生は雑草の様子を一緒に見るといって、いろんな子たちの世話をみてくれた。
元気のなさそうな子に気づいてくれたり、水を適切に与えてくれたり、虫がついていないか確認してくれたりした。まだ蒸し暑い時期が続くので、殺菌剤を散布したり……とにかくいろいろな作業を、細かいところまで手伝ってくれた。
「あれ？　これって……」
だから当たり前なことに、先生が人形の存在に気づくのも時間の問題だった。
「あ」
すっかり先生の目に触れることを失念していた。土を探しに行く前に髪を切っておいたことだけは正解だったかもしれない。
ほんとうは隠しておくべき……でもないのかもしれないけれど、少なくとも私以外の誰かにとって、いい印象の存在ではなかっただろうから。
でも先生なら、と思うところもあった。
「す、すみません、こんな不気味な人形をお見せしてしまって……で、でもよく見ればいいところもあって――」
「髪伸び人形、だよね」
先生にしては珍しく、私の言葉を遮って、見知ったもののように、そう言い当てた。
「えっと……ご存じなんですか……？」

「まあ」
あまり多くは語らなかった。
オカルトや噂話として有名な方だとは思うので、知っていてもおかしくはない。
ただ、それを見ただけで言い当ててしまうのには驚いた。しかも髪を切った後の人形を見てのことだ。シャーレにはそうした情報も多く集まってくるのかもしれない。
当の人形のほうは先生に怯えた表情をしている。
先生に失礼な反応をするな、と過ったけれど、この状況なら警戒もするだろうと思いなおした。
「……どこでこれを？」
「え、えっと、少し前に、この建物の入り口にあって、それで」
「拾ったんだ？」
「捨てられていたようだったので、なんとなく保護してしまって……」
あのとき彼女を拾い上げてしまったのは気の迷いだったけれど、気の迷いなりにただしい選択だったように感じる。
べつに、何か特別な理由があってそう思っているわけじゃない。
ただ、雑草のほかに趣味を見つけたのは、初めてだったのだ。それだけの理由だけど、十分だった。
だから、先生のする質問や言及が、とても怖かった。
初めて先生に雑草のことを話した時のように――そんなことをする大人でないと分かってはいるものの、笑われてしまうことをひどく恐れていた。
「あ、あの……！　先生……！」
「うん？」
「変な人形と思うかもしれませんが……いえ、変な人形ですけど、私は気に入っていて……」
「うん。素敵な子だと思うよ」
「で、では、何か私が余計なことをしてしまったんでしょうか……!?
いえ、きっとそうですよね、そうじゃなければ先生がそんな困った顔をするはずがないですもんね」

「ああ、いや、そんなことは」
「……ち、違うんですか？　なにか私が、先生を邪魔してしまうようなことをしたわけじゃ……」
「ううん。大丈夫だから、安心して」
子供に接するような声で、優しく対応してくれる。
私が何かしたわけじゃないのだとしても、人形の存在に困っていそうなのは分かっていた。
「あ、あの」
「うん」
「この子は何も悪いことをしないので……も、もしかしたら誰かに疎まれてばかりの存在なのかもしれないですけど、呪われてるのかもしれないですけど、でも、誰にも迷惑をかけないので」
「……うん。分かるよ」
「だから、その……あの……」
何を言いたいのかまとまらずに、そこで途切れた。
その先に自分の言葉を乗せてしまうと、先生に反抗したことになってしまいそうで、思考がつながらなかった。
先生はそんな私を気遣うように笑顔を向けてから、「まあ、そうだね」と前置きした。
「私としては回収したいところだけど」
「回収、ですか……？」
「うん。貴重な……えっと、今シャーレが集めてるものでね」
あまり語りたくなさそうだったので、私は結論を急いだ。
「え、えっと……持っていくんですか……？」
どうしよう、と先生が言った。
悩む素振りを見せていたものの、答えは決まっていたみたいだった。
「いや、いいよ。ハルカの大切なものみたいだし」
「い、いいんでしょうか……？」
「使い道も限られてるから」
そんなに数要らないし、と付け加えて、なぜか私のことを凝視して

くる。
「す、すみません、私なんかが先生に気をつかわせてしまって……」
「ううん、気にしないで」
「し、しにますか、しねばいいですか」
「しないで」

＊

「それで、拾ったんだっけ？」
「あ、はい。雑草の世話をしていたら外から泣き声が聞こえて、様子を見に行ったらこの子がいて」
　捨てにきた人間を探したものの、誰も見つからなかったことまで話した。
「そ、そういえば、結局誰がここに捨てにきたのか、まだ分かってないんですよね……」
「誰でもないんじゃない？」
「え……？」
「人形がここに来たんじゃないかな。自分で」
「で、できるんですか？」
「いや、わからないけど。でも呪われてるし」
　先生がそう言うならそうなんだろうと思うことにした。
　ひとりで持ち主の元を抜け出して、いったい何がしたかったんだろうと不思議に思った。
「寂しかった、とかだと思うよ。人形って、そんなイメージない？」
　元の所有者からはあまり良いように扱われていなかったのは分かる。
「それで、ひとりでここに……？」
「まあ、呪われてるし」
「そ、そんなもんですかね……」
「そんなもんだよ。よっぽど寂しかったんじゃないかな」
　先生はすっかり怯え切った表情の彼女を撫でて、それから私を見

た。
「今はそうでもなさそうだけどね」

＊

「それにしても、」
彼が切り出した。
「この子、普通の髪伸び人形とは違って、状態がいいね。よく整えられてる」
先生の言うことには、「髪伸び人形」は他にもたくさん個体がいるらしかった。
「ずっとハルカがお世話してたの？」
「……は、はい」
「そっか」
先生は興味深そうに何度か頷いて、人形と私を交互に見た。
そうやって、何気なく言った。
「かわいいね」
世界が止まるような心地がした。
「ハルカと同じ髪型で、とっても」
人形の頭を撫で上げて、そう言った。
今の彼女の髪型は私とまったく同じになっていた。
誰も不快にしない髪型を――と悩んで、ここ数日でようやく完成した。
変化のない髪型だけだと可哀想だと、夏になるまでに勉強したのだった。
「服装も整えてあげたんだね。正月にハルカが着てたのと似てる。これもかわいい」
先生が着物をまじまじと眺める。
似てるというより、そのものだった。
正月にレンタルした晴れ着をアル様から教えてもらって、使い道がなくて貯まるばかりだった貯金で買い取って、袖を通さず人形用の仕

立て屋に送って……それで……
「なんというか、ハルカに似ててかわいいよ」
……。
「……ハルカ？」
なんだか先生の声が浮ついて聞こえる。
「……へ、へへ」
景色が変わってしまうのを感じた。
止め方を知らないので、抗えないでいた。
「えへへ……」
気味の悪い笑みが抑えられない。
先生から顔を背けた先で、人形の口角が上がっているのが見えた。
――私みたいなやつ。

06
そろそろ髪を切らなければと焦りだすのは、髪伸び人形の表情が悲しそうになって、今にも泣きだしそうな雰囲気が漂ってきたときだ。
彼女の髪を切る感覚は楽しくて、今日はいつもと違う髪型にしてあげようとか考えるのも楽しい。
いまでもたまに失敗して、彼女の表情がホラーになるけど。
人形の髪を整えたあと、まだ彼女の表情が暗いことに気が付いた。

そこでようやく、私のほうも前髪が伸びてきたな、と自覚する。
そろそろ秋の感じがしてきたところだ。
頭を軽くすれば、いい気分になれるだろうと確信していた。
以前と同じ店には入りづらい性格なので、他のところを探した。
暗めの店を選んで、案の定暗めの人が鋏を扱っていて、私はそこで髪を切ってもらう。
相変わらず髪型にこだわりはないので、普段通りの髪型をそれとなく伝えて、そのとおりにしてもらう。
そうして数か月前と何ら変わらない私の形が出来上がって、面白みもなくまた同じ繰り返しに身を投じるのだ。
私がそれを心地よく感じるのは、前よりもいくらか単純な理由になった気がする。
たぶんその変化は、私にとって喜ばしいことなのだと思う。
それはたぶん先生のおかげで、人形のおかげで、雑草のおかげでもあって、事務所のみんなや、少しくらいは私のおかげでもあるのだと思う。
でも一番は先生のおかげだ。
先生はやはり間違いなかった。
先生は素晴らしい方だった。
みんな先生の力となるべきで、先生の妨げとなるものを排除すべきで、彼を尊敬すべきで、それで――ｅｔｃ．